

岷江ゴムボート航行遠征計画概要

<趣旨>

——古来、川は人間社会の成立や発展と、最も密接な関係を保ってきました。飲料水の確保は勿論、漁場の提供、政治的境界線その他の人間の活動とは、歴史的にも全く不可分な関係にあり、四大文明の発祥の地が全て河川の流域であったという事実も、当然と言えるかも知れません。また、川は交通、文化交流の手段としても利用されてきましたが、陸上輸送の発達した現代においては、その役割をほとんど（少なくとも日本では）失っており、観光の対象としての遊船等がその面影をとどめている程度です。

しかし、高山に源を発し、様々な地域、集落を潤した後、海へと流れ出ていく、言わば大自然の輪廻を感じさせ、人々が眠っている間もけっしてとどまっている事のない川という生き物を、機械化の恩恵を受けず、時には荒波と闘いながら人力だけで航行することは、我々に忘れかけていた何かを思い出させてくれるような、気がするのであります。——

先輩方が中国にフィールドを求めて以来、既に3年が経過、その間にメンバーも交替しましたが、我々のターゲットが岷江であることに、変わりありません。日本の川とはスケールが違い、なおかつその流域には、幾つかの名勝を抱きつつ長江に注ぐ岷江に、我が関西大学探検部のボートを浮かべ、国内で培ってきた技術がどれだけ通用するか試してみたい、と言う想いだけは変わらず受け継がれてきました。

また、この岷江は未だ誰も下ってはいず、我々がはじめて足跡を残すものであります。その点でも、大変意義深いものです。

我々はこの計画を是非成功させ、この活動が関西大学探検部の歴史の一頁に加えられ、日中両国の文化交流における一助になることを心よりのぞみます。

最後になりましたが、関係各位の御理解と御協力をお願い申し上げます。

<目的>

- 四川省岷江の許可される限りの全範囲の航行

（黄胜关～灌县間、230kmを4人乗り手漕ぎゴムボートによって下る。）

- 同江の源流を踏む

<隊員構成>

隊長・記録 岩 根 大 典 (22)

渉外 工学部

副隊長・撮影 山 下 和 彦 (22)

文学部

装 備 大 西 伸 紀 (21)

経済学部

会計・撮影 加 藤 隆 文 (21)

社会学部

食糧・医療 村 上 哲 也 (20)

経済学部

<現地連絡本部>

中国国際体育旅游公司

中国 北京 体育館路10号

☎ 5112183 TELEX 222283 CIST CN

<大阪連絡本部>

関西大学学生課

大阪府吹田市山手町 ☎06-388-1121

関西大学探検部OB

安 川 晶 浩

<地域概略>

四川省

北部岷山山脈の麓には、灌縣を扇頂とする扇状地が開けその下端に近く成都がある。盆地底は200~400m、丘陵は1000m以下で北側の山地が冬の寒風を遮るので、暖かく、夏の平均気温も26~30℃である。また、岷江流域部は中国内の他の地域に比べ、日照時間が短いというのも、一つの特徴である。

北部のパンダの自然保護区でも知られる。

岷江

岷江は、標高約3500m~3600mの山に源を発しており、その流れは幾つかの川を併せて大きくなり、成都の近くを通過し長江に注ぐ。黄勝関~汶川までは、山岳地帯を流れ、灌縣以下は平野となり、川幅も200m~300mある。また、成都以南は汽船の往来も頻繁である。水量は6月終わってから増水し始め、7月には高頂に達し、8月には減水し始める。上流部の一部分は兩岸が地震により崩れ落ちて、川を堰とめた状態のところもあるらしい。平野部では、樂山より下流には4~5個の瀬があり、道士、岔魚と呼ばれる瀬は、かなりの規模であるらしい。

・黄龍寺—毎年、旧暦6月16日は、この地方の大きな祭日となっていて、付近一帯の住民が集まってくるばかりか、北部の省などからも、チベット族、回族、羌族の各民族が続々やってきて、お祭りに参加する。

・都江堰—中国古代の有名な水利工事施設である。昔、岷江は絶えず氾濫し住民に大きな被害を与えた。そこで紀元前3世紀に秦朝蜀部の大守李冰とその息子が都江堰を築き、江水を分流させて災いを福に転じ、農業と養蚕を盛んにした。これ以後四川の西部平原は「沃野千里、天府の国」となった。

・凌雲寺—凌雲山の西壁にそびえる世界最大の石刻仏像で知られ、岷江からもみることができる。高さは71mもありその足の甲には100人もの人が座れる。

岷江流域概略图

